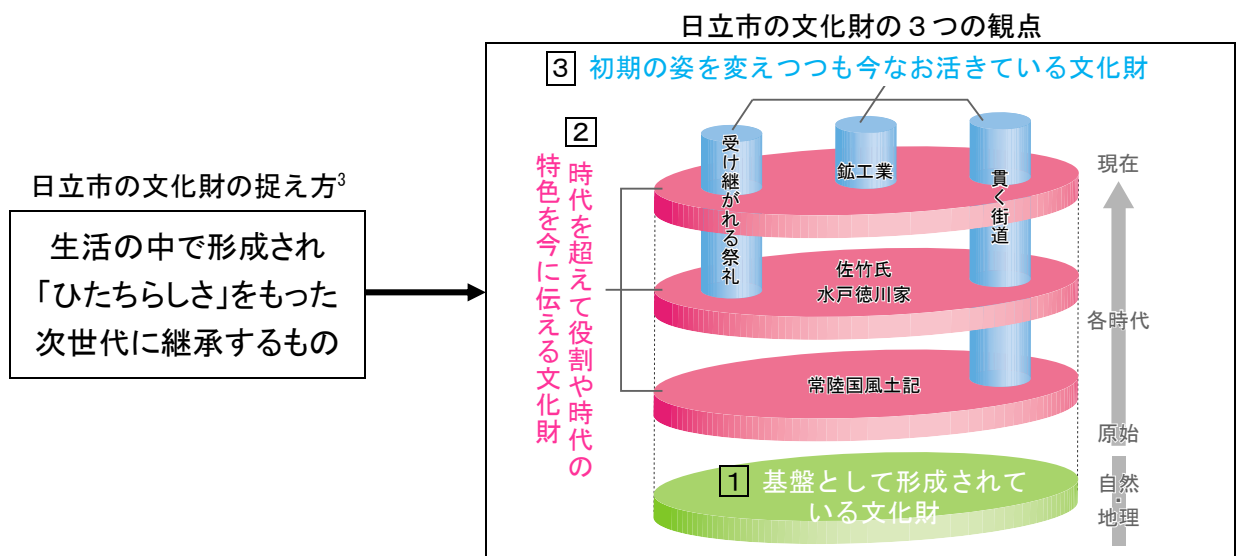


### 第3章 日立市の歴史文化の特徴の考え方

#### 1 歴史文化の特徴を整理するための観点

第1章・第2章で整理したように、本市では、地形、水系、生態系等の自然的・地理的環境が基盤となり、原始時代から現在までを歴史的背景として、現在の社会的状況が形成されてきた。これらの自然的・地理的環境、歴史的背景、社会的状況の関わりによって「市民の生活の中で形成されてきた、『ひたちらしさ』をもった次世代に継承するもの」が、本市の文化財である。

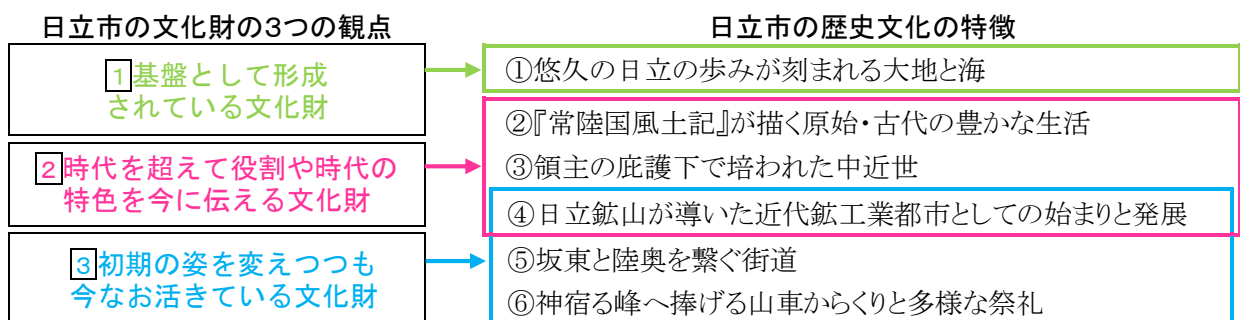
このような文化財の捉え方を基に、歴史文化の特徴を明確にするため、本市の文化財を3つの観点によって再整理した。3つの観点とは、自然的・地理的な「**1**基盤として形成されている文化財」の上に、原始時代から現在までの各時代のまとまりにおいて「**2**時代を超えて役割や時代の特色を今に伝える文化財」が発生し、一方で、各時代を超えて「**3**初期の姿を変えつつも今なお活きている文化財」も現在に表出する、というものである。本市の歴史文化の特徴は、このような観点から整理した。



図：日立市の歴史文化の特徴を整理するための文化財の3つの観点

#### 2 歴史文化の特徴の考え方

文化財の3つの観点から整理される本市の歴史文化の特徴は、以下の①～⑥である。「**1**基盤として形成されている文化財」から①、「**2**時代を超えて役割や時代の特色を今に伝える文化財」から②③④、「**3**初期の姿を変えつつも今なお活きている文化財」から④⑤⑥を導き出すことができる。



<sup>3</sup> 第2章「1 文化財の把握方針」「(1) 本計画における文化財の捉え方」に示した。

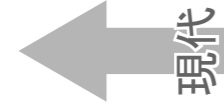
### 3 歴史文化の特徴を示す文化財とその集積地

各歴史文化の特徴を示す具体的な文化財は、以下のとおりである。また、それらの文化財の分布状況から抽出される集積地を、集積地内に位置する代表的な文化財名を用いて示した。歴史文化の特徴「③領主の庇護下で培われた中近世」は、中近世が時代ごとの特徴によって3つの時代に分かれることから3つの細目を設けた。

表：日立市の歴史文化の特徴及び特徴を示す文化財等

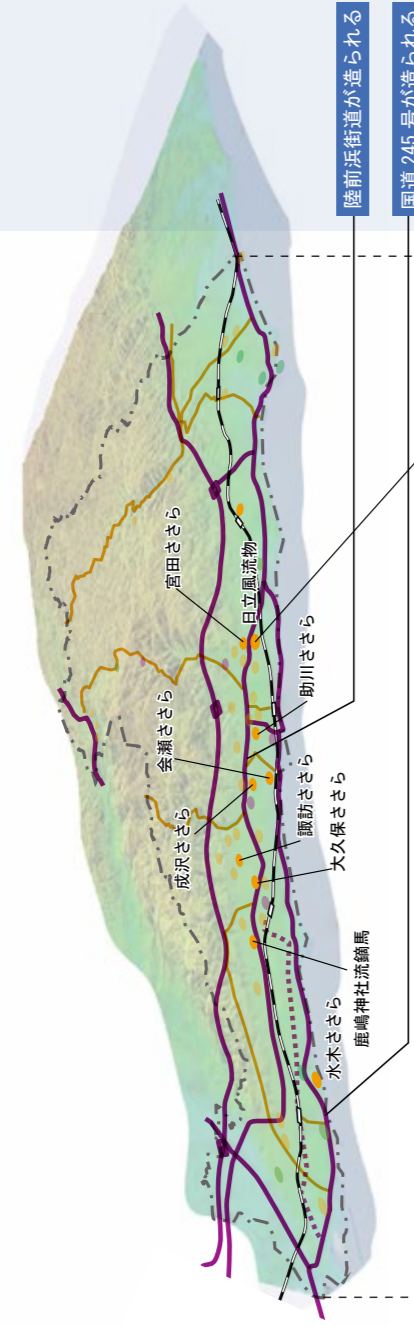
日立市の歴史文化の特徴	日立市の歴史文化の特徴を示す文化財	日立市の歴史文化の特徴を示す文化財の集積地
①悠久の日立の歩みが刻まれる大地と海	いぶき山イブキ樹叢、 <u>本山の一本杉</u> 、 <u>海鷲渡来地</u> 、 <u>カンブリア紀層</u> 、御岩山、黄銅鉱 等	—
②『常陸国風土記』が描く原始・古代の豊かな生活	泉が森、『常陸国風土記』、『常陸国風土記』記載の地名「高市」や「飽田の村」、 <u>南高野貝塚</u> 、 <u>赤羽横穴墓群</u> 等	泉が森周辺の集積地
③領主の庇護下で培われた中近世	③-1 中世の奥七郡から翻った佐竹扇	大窪城跡及び暇修館跡、相馬碑、要害城跡、泉神社 等
	③-2 近世日立を巡った水戸黄門の足跡	木造万年大夫夫婦坐像（諏訪神社管理）、 <u>小野家住宅</u> 、助川宿跡 等
	③-3 幕末の海防施設が語る動乱	助川海防城跡、 <u>山野邊家墓所</u> 、 <u>藤田東湖揮毫諏訪神社大のぼり</u> 等
④日立鉱山が導いた近代鉱工業都市としての始まりと発展	旧久原本部、 <u>旧共楽館</u> 、 <u>5馬力誘導電動機</u> 、大煙突、サクラ、日立市天気相談所 等	旧久原本部周辺の集積地
⑤坂東と陸奥を繋ぐ街道	長者山遺跡、古代官道跡、 <u>豎破山の太刀割石</u> 、旧岩城相馬街道（国道6号）、旧棚倉街道（国道349号）、地名「前塚」（助川一里塚跡） 等	長者山遺跡周辺の集積地
⑥神宿る峰へ捧げる山車からくりと多様な祭礼	日立風流物、神峰神社、 <u>日立のささら</u> 、 <u>鹿嶋神社流鏝馬</u> 、御岩神社回向祭、鳥追いまつり、日立さくらまつり 等	風流物周辺の集積地

<sup>4</sup> 下線は指定等文化財である。



現代

### ⑤ 坂東と陸奥を繋ぐ街道



### ④ 日立鉾山が導いた近代鉾工業都市としての始まりと発展

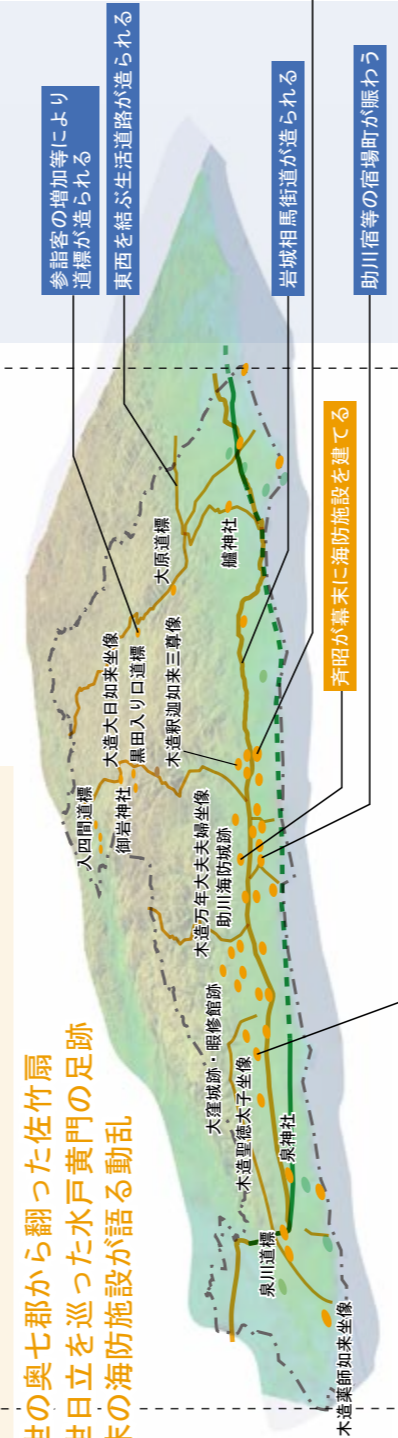


日立風流物がユネスコ無形文化遺産として記載される

日立鉾山の発展により経済が活性化し労働者の娯楽としての役割も期待され、風流物が大型化する

### ③ 領主の庇護下で培われた中近世

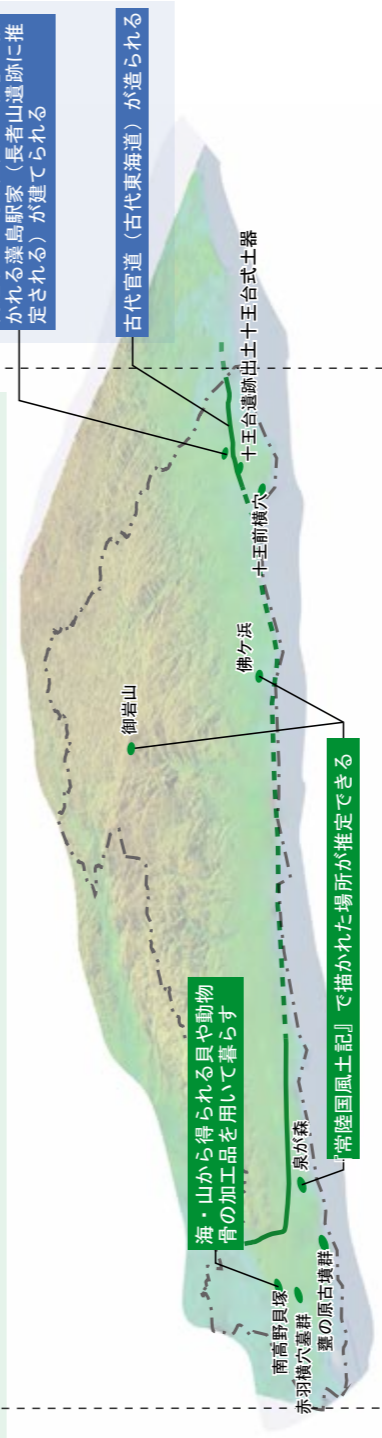
- 1) 中世の奥七郡から翻った佐竹扇
- 2) 近世日立を巡った水戸黄門の足跡
- 3) 幕末の海防施設が語る動乱



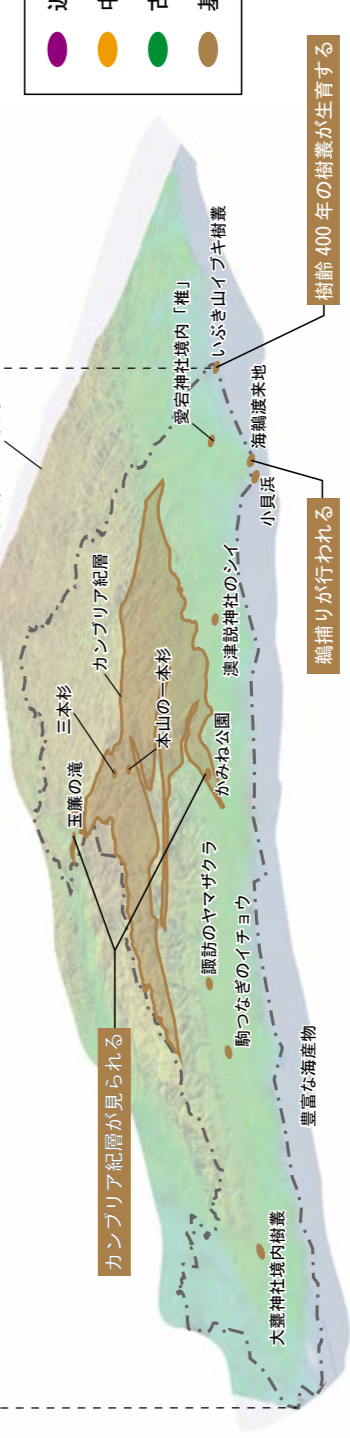
光圀の命により神峰神社が宮田村・御川村・相賀村の鎮守になり、渡御の行程が長くなったことで風流物が装飾的になる

佐竹義重によって鹿嶋神社流鏝馬が開始される

### ② 『常陸国風土記』が描く原始・古代の豊かな生活



### ① 悠久の日立の歩みが刻まれる大地と海



- 近代以降に形成された文化財
- 中近世に形成された文化財
- 古代以前に形成された文化財
- 基盤として形成されている文化財

図：日立市の歴史文化の特徴イメージ

## 4 歴史文化の特徴

### (1) 悠久の日立の歩みが刻まれる大地と海

本市は東側が太平洋に、西側が多賀山地に面しており、海と山の両方の特徴を有する地域である。南北方向に連なる海岸線に面した太平洋から享受される豊富な魚介類は、古来、日立の人々の生活を支えてきた。約5億年前に形成されたカンブリア紀の地層上に立地する多賀山地からは、豊富な地下資源が産出することで鉱工業都市日立の発展の要となった。本市は海と山を中心に、全国唯一の鵜捕りの対象となるウミウの渡来や様々な場所で見られる巨木や樹叢が生育する豊かな生態系が市内で展開しており、この自然的・地理的環境が本市の歴史文化全体の基盤となっている。

歴史文化の特徴(1)を示す文化財は以下のとおりである。



写真:本市北西端の豎破山から臨む多賀山地  
(『新郷土日立 地理 <改訂二版>』より)



写真:本市の海岸線と海岸段丘  
(『新郷土日立 地理 <改訂二版>』より)

### ア 文化財一覧

分類		文化財
自然物	地形・地質	御岩山、カンブリア紀層、多賀山地、地下資源(黄銅鉱・石炭・石灰岩)等
	樹木	<社寺に生育する樹木> <u>愛宕神社境内「椎」<sup>5</sup></u> 、御岩山の三本杉、大甕神社境内樹叢、 <u>澳津説神社のシイ</u> 、 <u>駒つなぎのイチヨウ</u> 等 <歴史や伝承に関わる樹木> 本山の一本杉、サクラ、助川小学校四代桜、諏訪梅林等 <貴重種等の樹木> <u>いぶき山イブキ樹叢</u> 、 <u>諏訪のヤマザクラ</u> 、大平鎮守のスギ、久慈小学校のケヤキ、ヒカリモ、日立紅寒桜、藤坂のサルスベリ、古田のヤマナシ等
	滝	<u>玉簾の滝</u> 等
	石	大甕神社宿魂石、烏帽子岩、豎破山の太刀割石等
	浜	<u>海鵜渡来地</u> 、 <u>小貝浜</u> 、伊師浜等
	海産物	アンコウ、シラス、イワシ、サバ、サンマ、タコ等
	建造物	海関係
大地関係		日鉱記念館等
公園、道		かみね公園・平和通り、赤羽緑地等
伝統技術		<u>鵜捕りの技術</u> 等

<sup>5</sup> 下線は指定等文化財である。

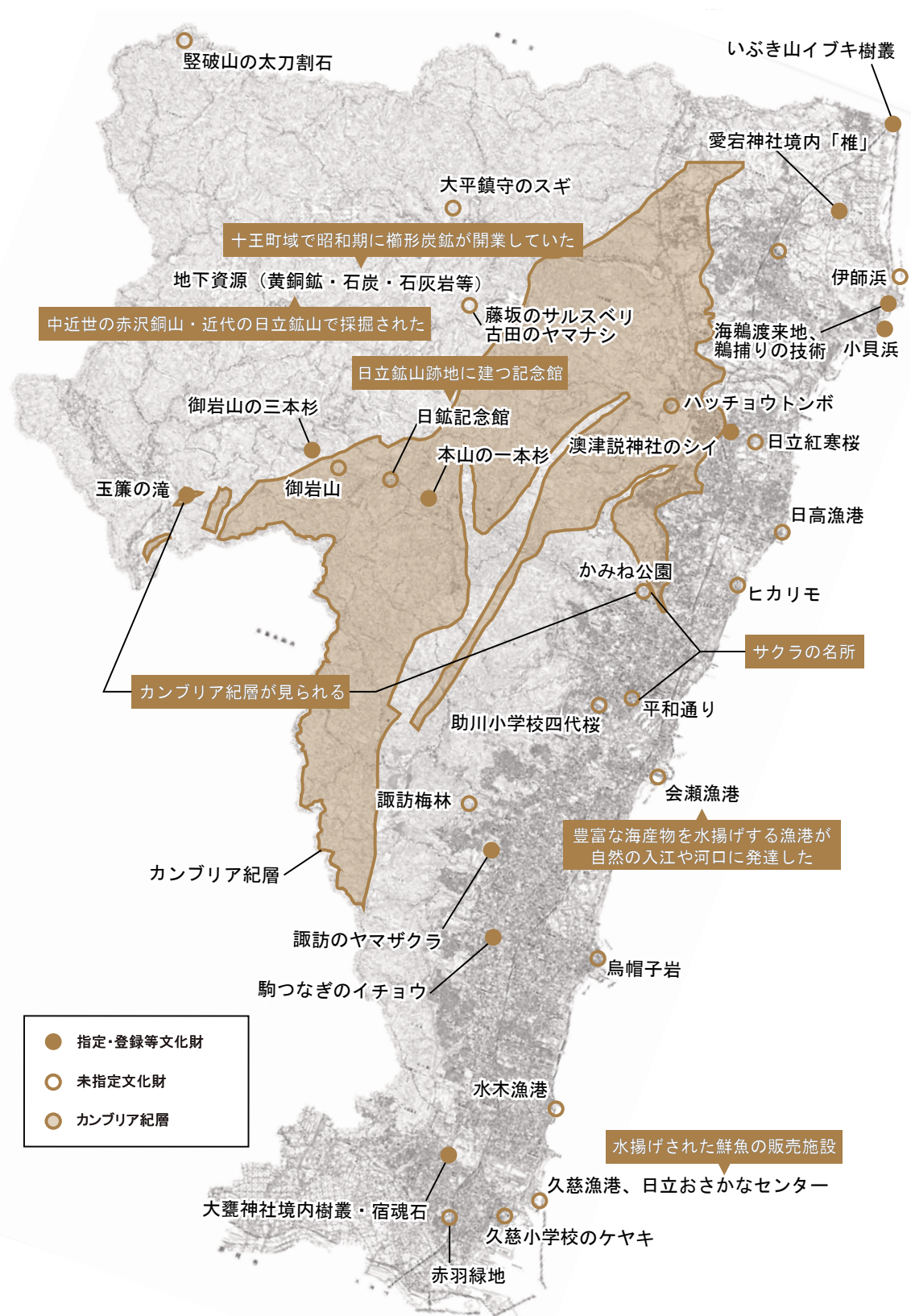
イ 主な文化財の概要

名称	概要	写真
御岩山	御岩山は多賀山地内の一山であり、古代の『常陸国風土記』に記載されている「賀毘礼の高峰」に推定されている。近世に水戸徳川家によって御岩神社が創建された信仰の地である。	
カンブリア紀層 (写真:『新郷土日立 地理 <改訂二版>』より)	多賀山地の地層で最も古いものは約5億年前のカンブリア紀に遡り、これは国内でも最古の貴重な地質である。カンブリア紀層は、山間部の御岩神社や玉簾寺だけでなく、市内のかみね公園展望台付近などで確認することができる。	
日立鉱山の黄銅鉱	カンブリア紀層の中にある鉱床の一つに、層上含銅硫化鉄鉱床がある。鉱床からは黄銅鉱という鉱石が採掘されるが、赤沢銅山時代から開発が進まなかった。日立鉱山は、機械化によって大規模な採掘に成功し、これが現代の工業都市日立の誕生に繋がった。	
大甕神社境内樹叢 澳津説神社のシイ (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)	澳津説神社は近世に徳川光圀の命で一村の総鎮守となった神社であり、境内のスダジイは推定樹齢300年以上の老巨木である。スダジイは本市の指定保存樹木の中で圧倒的に多い樹木であり、大甕神社の樹叢もスダジイを主とする自然林である。	
いぶき山イブキ樹叢 (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)	本市北境の花貫川河口にあるいぶき山という小高い丘に、推定樹齢約400年のイブキが自生している。イブキは温暖で夏季に降水量が多く潮風の当たる場所に生育し、このイブキ樹叢は自然分布の北限に近い。伐採や盗採で減少し、現在は8本しか残っていない。	
本山の一本杉 (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)	古くから本山に林立していた杉の大樹は、中近世の赤沢銅山時代から次々と枯れたり伐採されて減っていった。この一本杉はその中で唯一現代に残ったものであり、日立鉱山創業以降も開発の神木として大切に保護されてきた。	

名称	概要	写真
<p><b>サクラ</b> (写真:ひたち風 HP より)</p>	<p>サクラは本市の「市の花」であり、その始まりは日立鉱山が煙害対策で植林したオオシマザクラに遡る。現在、かみね公園と平和通りのサクラは「日本さくら名所 100 選」に選ばれており、日立さくらまつりは日立風流物も公開される観光イベントとして賑わいを見せている。</p>	
<p><b>玉簾の滝</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>県北の名瀑として名を馳せている高さ18m、幅8m の優美な滝であり、玉簾寺の境内に位置する。滝つぼ付近に露出している岩石は角閃石片麻岩といい、カンブリア紀のものである。「玉簾の滝」の名称は、徳川光圀が命名した。</p>	
<p><b>豎破山の太刀割石</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>十王町の豎破山山頂には、古代に八幡太郎義家が切ったとされる真っ二つに割れた卵型の巨石があり、太刀割石と呼ばれている。豎破山は蝦夷征討の行路に戦勝を祈願する信仰の地であり、太刀割石も、蝦夷征討の神として崇敬されていたとされる。</p>	
<p><b>海鵜渡来地 鵜捕りの技術</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>小貝浜から伊師浜にかけての海岸には、春と秋にウミウが渡来し、全国唯一の鵜捕りが行われている。</p>	
<p><b>海産物(アンコウ、シラス、イワシ、サバ、サンマ、タコ等)</b></p>	<p>本市では、東部の太平洋を舞台に沿岸漁業が発達し、現代でも魚介類が豊富に水揚げされている。タコは「さくらダコ」として市のさかなになるほど象徴的な海産物であり、シラスやイワシ等も、加工食品等として本市の特産物「ベストセレクションひたち」に選ばれている。</p>	
<p><b>漁港 日立おさかなセンター</b> (写真:『新郷土日立 地理 &lt;改訂二版&gt;』より)</p>	<p>本市では、豊富な海産物を水揚げする漁港が、入江や河口に発達した。現在、付近に久慈漁港が位置する久慈川河口では、古代から人々が海の恩恵を受けながら暮らしていたが、現在でも日立おさかなセンターがあるように、海の恵みを受ける日立の漁業の中心地である。</p>	

## ウ 文化財の分布状況

歴史文化の特徴（1）を示す文化財は、本市の文化財を形成してきた基盤にあたる自然物や、それら自然物の豊かさが象徴されている建造物や及び伝統技術等である。市内全域に分布しているため、文化財の集積地は抽出しない。



図：歴史文化の特徴（1）「悠久の日立の歩みが刻まれる大地と海」を示す文化財の分布状況

## (2) 『常陸国風土記』が描く原始・古代の豊かな生活

原始・古代には、人々は海や山から得られる天産物の恩恵を受け、久慈川・十王川流域を中心に集落を形成して豊かに暮らしていた。

風土記は奈良時代初期に全国60余国で作成された文献であるが、現存するのは5風土記に限られる。『常陸国風土記』はこのうちの1つであり、東日本では唯一のものである。

『常陸国風土記』には、「賀毘礼の高峰」や「仏の浜」、「大井」、「飽田村」等につまわる伝承が記載されており、これらの地名の多くについて現在地が推定可能であるため、現代においても古代の有様を感じることができる。また、『常陸国風土記』には、海と山の幸に恵まれた当時の人々の暮らしが描かれており、それが実際にあったと想像できる遺跡が久慈川や十王川を中心に発見され、食物を入れていたと考えられる土器や、周辺に生息していた動物骨を利用した釣針、貝でできた装身具等が遺物として発掘されている。

歴史文化の特徴(2)を示す文化財は以下のとおりである。



写真：『常陸国風土記』記載の「賀毘礼の高峰」に推定される御岩山(『図説 日立市史』より)



写真：『常陸国風土記』記載の「密筑の里の大井」に推定される泉が森(『図説 日立市史』より)

### ア 文化財一覧

分類	文化財
建造物	大甕神社
遺跡	<u>かんぶり穴横穴墓群(十王前横穴)</u> 、 <u>長者山遺跡</u> 、 <u>甕の原古墳群3号墳・4号墳</u> 、 <u>南高野貝塚</u> 、 <u>赤羽横穴墓群</u> 、 <u>十王台遺跡</u> 、 <u>西の妻古墳</u> 、 <u>舟戸山古墳</u> 等
遺物	<u>十王台遺跡出土十王台式土器</u> 、 <u>愛宕原火葬墓出土骨蔵器</u> 、 <u>十王台南遺跡第1号住居跡出土遺物</u> 、 <u>諏訪遺跡出土縄文土器<sup>6</sup></u> 等
文献	『常陸国風土記』 等
版木	<u>訂正常陸国風土記版木</u> 付箱板2枚 等
『常陸国風土記』記載の地名推定地	<u>泉が森</u> (「密筑の里の大井」推定地)、 <u>長者山遺跡</u> (「藻島の駅家」推定地)、 <u>度志観音</u> (「仏の浜」推定地)、 <u>御岩山</u> (「賀毘礼の高峰」推定地)、「 <u>遇鹿</u> 」推定地、「 <u>飽田の村</u> 」推定地、「 <u>高市</u> 」推定地 等

<sup>6</sup> 下線は指定等文化財であるが、日立市郷土博物館収蔵であるため、所在地を図中に示していないものである。



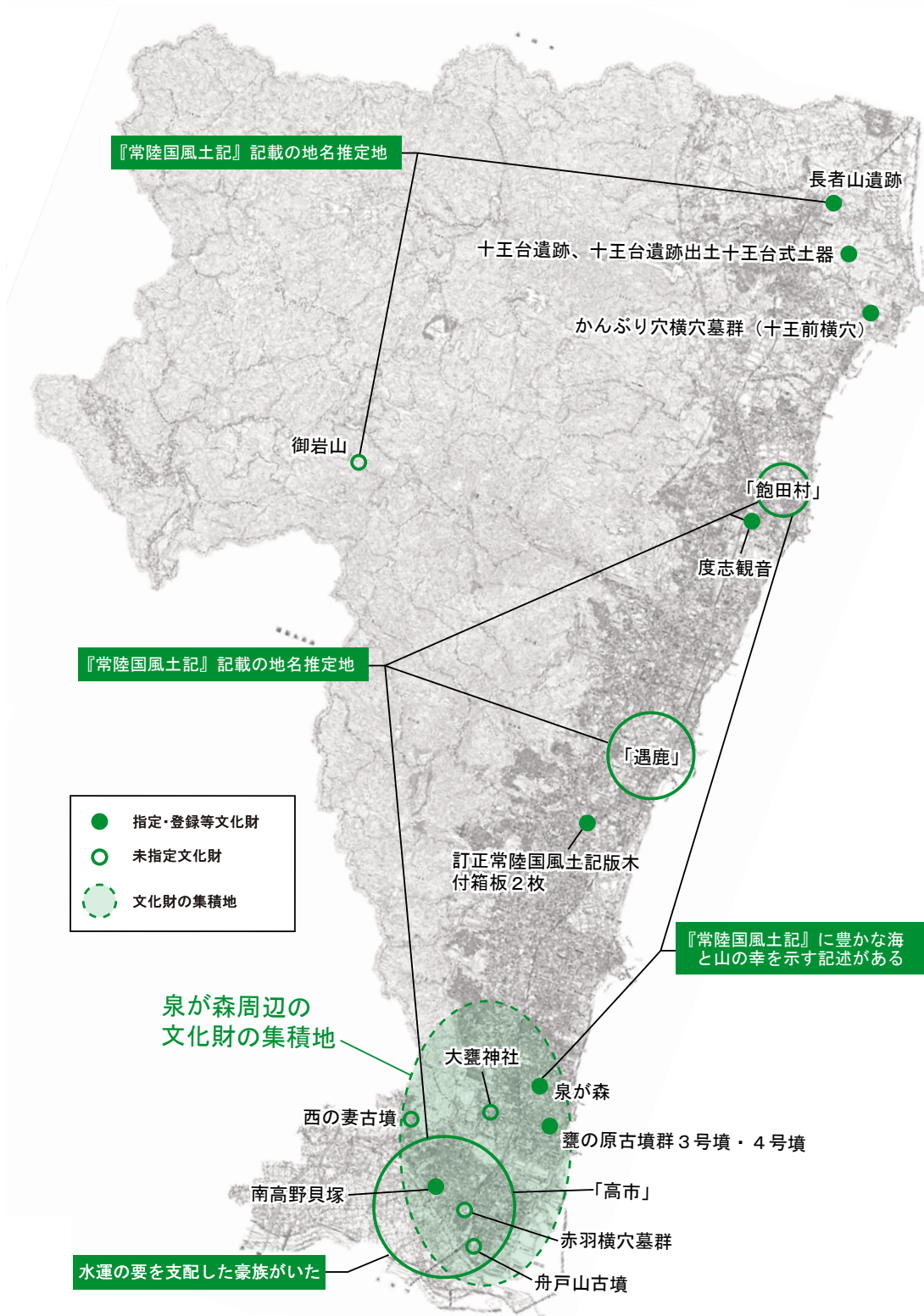
## イ 主な文化財の概要

名称	概要	写真
<p><b>かんぶり穴横穴墓群</b>  <b>(十王前横穴)</b>            (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>十王川沿いで発見された110基以上の横穴墓のうちの一つである。九州地方に多くみられる彩色と線刻が施された装飾のある横穴墓であり、遠隔地との交流を推測しうるものである。</p>	
<p><b>南高野貝塚</b>            (写真:『新郷土日立 歴史』より)</p>	<p>久慈川の支流茂宮川に面した台地上に立地する。貝でできた装身具である貝輪や動物骨を加工して作成した釣針等が出土していることから、当時の人々の生活においても河川や海が果たす役割が大きかったことが分かる。</p>	
<p><b>赤羽横穴墓群</b>            (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>従来、横穴墓の被葬者は古墳の被葬者より低い階層の人々であると考えられてきた。しかし、赤羽横穴墓群からは金銅製の冠などの優品が出土し、久慈川河口や高市を支配した豪族が埋葬されたと推定されている。</p>	
<p><b>西の妻古墳</b>  <b>舟戸山古墳</b>            (写真:西の妻古墳群1号墳『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>古墳や集落は山間部を除く本市のほぼ全域で確認されるが、特に久慈川流域には濃密に分布している。現在でも墳丘が残る舟戸山古墳や西の妻古墳には、水運の要を押さえていた有力者の存在が浮かび上がってくる。</p>	
<p><b>十王台遺跡出土十王台式土器</b>            (写真:『図説 十王町史』より)</p>	<p>十王台遺跡群は、十王町伊師本郷の標高 40m前後の台地上に広がる。ここで発見された土器は、関東地方における弥生時代後期の標識的な土器で、「十王台式土器」と名付けられており、那珂川・久慈川を中心に福島県南部域から千葉県北部域にかけて出土している。</p>	
<p><b>『常陸国風土記』</b>            (写真:『図説 日立市史』より)</p>	<p>現存する5風土記のうち東日本に唯一残る『常陸国風土記』には、古代本市域の地名や産物、伝承等が記載されている。地名には現在地を推定できるものも多く、当時の日立の様相を推し量ることのできる貴重な文献である。</p>	

名称	概要	写真
<p><b>泉が森</b>(『常陸国風土記』記載の「密筑の里の大井」推定地) (写真:『図説 日立市史』より)</p>	<p>『常陸国風土記』には「密筑の里に清らかな泉があり大井と呼ばれている」という旨の記述があり、大井周辺が理想郷のように豊かな土地で、人々が飲んで遊び楽しむ様子が示されている。この「密筑の里の大井」は現在の泉が森に当たると推定されている。</p>	
<p><b>長者山遺跡</b>(『常陸国風土記』記載の「藻島の駅家」推定地) (写真:日立の観光案内 HP より)</p>	<p>『常陸国風土記』に記述がある「藻島の駅家」は、和銅期～養老期(708～724)に反乱を起こした陸奥国の蝦夷征討のために設置された駅家であり、現在の長者山遺跡に当たると推定されている。</p>	
<p><b>御岩山</b>(『常陸国風土記』記載の「賀毘礼の高峰」推定地) (写真:『図説 日立市史』より)</p>	<p>『常陸国風土記』に記載されている「賀毘礼の高峰」は、多賀山地内の一山である御岩山に推定されている。近世に水戸徳川家によって御岩神社が創建された信仰の地である。</p>	
<p>『常陸国風土記』記載の「<b>遇鹿</b>」推定地 (写真:『新郷土日立 地理 &lt;改訂二版&gt;』より)</p>	<p>『常陸国風土記』には現在の相賀町・会瀬町の古地名に推定されている「遇鹿」について、倭武天皇と橘皇后が道をやって来て出会った場所であると記載されており、日立の特徴である「道」も関係している。</p>	
<p>『常陸国風土記』記載の「<b>飽田の村</b>」推定地 (写真:『図説 日立市史』より)</p>	<p>『常陸国風土記』には現在の相田町の古地名に推定されている「飽田の村」について、倭武天皇夫婦が海と山に分かれ、どちらが多くを幸を獲れるか競いあい、結果橘皇后が海の幸を「飽きるほど食べた」という伝承が記載されている。</p>	
<p>『常陸国風土記』記載の「<b>高市</b>」推定地 (写真:『図説 日立市史』より)</p>	<p>『常陸国風土記』に記述がある「高市」は、高い所に位置した市のことであり、現在の久慈町・南高野町・石名坂町周辺に当たると推定されている。赤羽横穴墓群に埋葬されていた豪族が支配した水運の要であり、人々の交易の場となった。</p>	

## ウ 文化財の分布状況と集積地

歴史文化の特徴（２）を示す文化財は、市内南北の久慈川及び十王川河口周辺の平野部を中心に分布している。特に、久慈川河口には、『常陸国風土記』に記載のある「密筑の里の大井」推定地の泉が森及び「高市」推定地や、赤羽横穴墓群等の豪族の古墳が集積しており、泉が森周辺の文化財の集積地を抽出することができる。



図：歴史文化の特徴（２）「『常陸国風土記』が描く原始・古代の豊かな生活」を示す文化財の分布状況と泉が森周辺の集積地

### (3) 領主の庇護下で培われた中近世

中世の佐竹氏、近世の水戸徳川家の支配によって、本市域では、貨幣経済の浸透や東西の街道の形成とともに、農業を中心に林業、水産業、商業が発展し、赤沢銅山や大久保金山では鉱山開発が始まった。また、領主によって神社や仏像が保護され、参詣客が増加し人々の往来が活発になった。原始・古代から暮らしの質は大きく変化し、幕末には海外にまで人々の意識は広がった。



写真：佐竹義篤によって造立(再建)されたことが棟札に記されている泉神社  
 (『図説 日立市史』より)

#### (3) - 1 中世の奥七郡から翻った佐竹扇

中世の日立を治めたのは、源義光を祖とする佐竹氏である。佐竹氏は現在の常陸太田市に本拠太田城を構え、本市域があった佐都東郡・多珂郡を含む奥七郡を支配した。家紋には、「五本骨扇に月丸」という黒い扇に日の丸を施したデザインが使用されていた。

本市域には、大窪城や要害城など、佐竹氏の家臣達が築いた居城の城館跡や、佐竹氏が社寺を保護し、造立や再建を経済的に支援することで民衆を支配しようとした痕跡である棟札が残っている。特に、佐竹氏は大久保鹿嶋神社への崇敬が篤く、現在に伝わる当神社の流鏝馬は佐竹氏が奉納したことが始まりといわれている。その他、平安時代から中世にかけて作成された仏像や絵画等の貴重な文化財が本市内に伝わる。



写真：木造万年大夫夫婦坐像  
 手前が胎内像、奥が徳川光圀が作らせた新像  
 (『図説 日立市史』より)

歴史文化の特徴 (3) - 1 を示す文化財は以下のとおりである。

#### ア 文化財一覧

分類		文化財
建造物	神社(棟札)	臚神社(棟札)、吉田神社(棟札)、泉神社(棟札)、大久保鹿嶋神社(棟札)、塩竈神社(棟札) 等
石造物	碑	相馬碑 等
仏像		木造阿弥陀如来坐像、木造釈迦如来三尊像、木造聖徳太子坐像、木造大日如来坐像 等
絵画		絹本著色阿弥陀如来来迎図 等
経典		大般若波羅密多經 等
鏡		古鏡、蒔絵鏡箱 等
城館跡		大窪城跡、相賀館跡、櫛形城跡、久慈城跡、友部城跡、山尾城跡、要害城跡 等
祭礼		鹿嶋神社流鏝馬 等

## イ 主な文化財の概要

名称	概要	写真
<p><b>泉神社</b> (写真:『図説 日立市史』より)</p>	<p>泉神社(水木町)は『延喜式』神名帳に掲載された天速玉姫神社に比定される古代からの神社である。棟札には佐竹義篤の外護によって神殿造立(再建か)されたことが記されている。</p>	
<p><b>相馬碑</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>相馬碑は、永禄5年(1562)に相馬中村(相馬市)の城主相馬盛胤が佐竹氏の領地であった本市域に侵入し孫沢原で戦った際、戦死した多くの将士の供養碑である。中世末期の建立と推定される。</p>	
<p><b>大窪城跡(暇修館跡)</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>大窪城は治承元年(1177)に平氏が久保の愛宕山に築いた城で、応永期(1394～1428)に佐竹氏の重臣大窪氏が居城とし、現在地である天神山へ移した。大窪城跡の一部には、天保10年(1839)に水戸藩の郷校興芸館が建てられ、後に暇修館に改称された。</p>	
<p><b>要害城跡</b> (写真:『図説 日立市史』より)</p>	<p>要害城は、永禄5年(1562)の孫沢原での戦いで以前の城が落ちた後に創建された、佐竹氏家臣の孫沢権大夫頼茂の居城と伝わる。近代には、要害城跡地に日立製作所の福利厚生施設である要害クラブが建てられ、現在も利用されている。</p>	
<p><b>鹿嶋神社流鏝馬</b></p>	<p>毎年10月29日に秋季例大祭で行われる大久保鹿嶋神社の行事で、馬1頭、騎手・引手各1人が神社参道を歩みながら3箇所的に矢を射ることを3回繰り返す。佐竹義重が関わり、天正12年(1584)に始まったと伝えられている。</p>	

## ウ 文化財の分布状況と集積地

歴史文化の特徴(3)－1を示す文化財は、市内全域に分布している。特に、市内中心部には、城館跡のうち唯一の指定文化財である大窪城跡や、佐竹氏の崇敬が篤く流鏑馬神事が現在まで伝わっている大久保鹿嶋神社、佐竹氏と相馬氏との領地争いの痕跡である相馬碑等が集積しており、大窪城跡周辺の文化財の集積地を抽出することができる。



図：歴史文化の特徴(3)－1「中世の奥七郡から翻った佐竹扇」を示す文化財の分布状況と大窪城跡周辺の集積地

### (3) - 2 近世日立を巡った水戸黄門の足跡

近世になると国替えによって佐竹氏が去り、代わって水戸徳川家が本市域を治めるようになった。徳川幕府によって脇往還である岩城相馬街道や棚倉街道が本市域に整備され、御岩神社をはじめとする社寺への参詣客等のために宿駅や道標が設けられた。助川宿は本市域で最も栄えた宿駅であり、本陣「長山家」には水戸藩第2代藩主徳川光圀も度々訪れていた記録が残る。

光圀は、近世の日立に多大な影響を与えた人物である。明治22年(1889)に誕生した本市域の旧村名「日立村」の地名は、光圀が海から昇る朝日の美しさを「日の立ち昇るところ領内一」と称えたという故事に由来するという説がある。また、玉簾寺境内にある「玉簾の滝」の名称も、滝の様相が軒下に吊るす簾に似ているところから、光圀が命名したといわれる。光圀は仏像の保護や社寺改革に取り組み、日立風流物はこの時光圀が神峰神社を宮田村1箇村から助川村と相賀村を含めた3箇村の総鎮守と改めたことにより発展した。その他、近世に作成された絵画や燈籠等の貴重な文化財が本市内に伝わる。

歴史文化の特徴(3) - 2を示す文化財は以下のとおりである。

#### ア 文化財一覧

分類		文化財
建造物	神社	御岩神社、諏訪神社、吉田神社 等
	住宅	小野家住宅 等
石造物	道標	泉川道標、入四間道標、大原道標、黒田入り口道標 等
	燈籠	東叡山石燈籠 等
	碑	照山修理頭彰碑 等
仏像	日光・月光菩薩立像、木造観音菩薩坐像、木造釈迦如来・多宝如来並坐像、木造薬師如来坐像、木造阿弥陀如来坐像、木造万年大夫夫婦坐像 等	
絵画	絹本着色涅槃図...等	
祭礼の出し物	日立風流物 等	
自然物	澳津説神社のシイ、玉簾の滝、大甕神社宿魂石 等	
宿駅跡	助川宿跡 等	
地名	「玉簾の滝」、「日立村」 等	

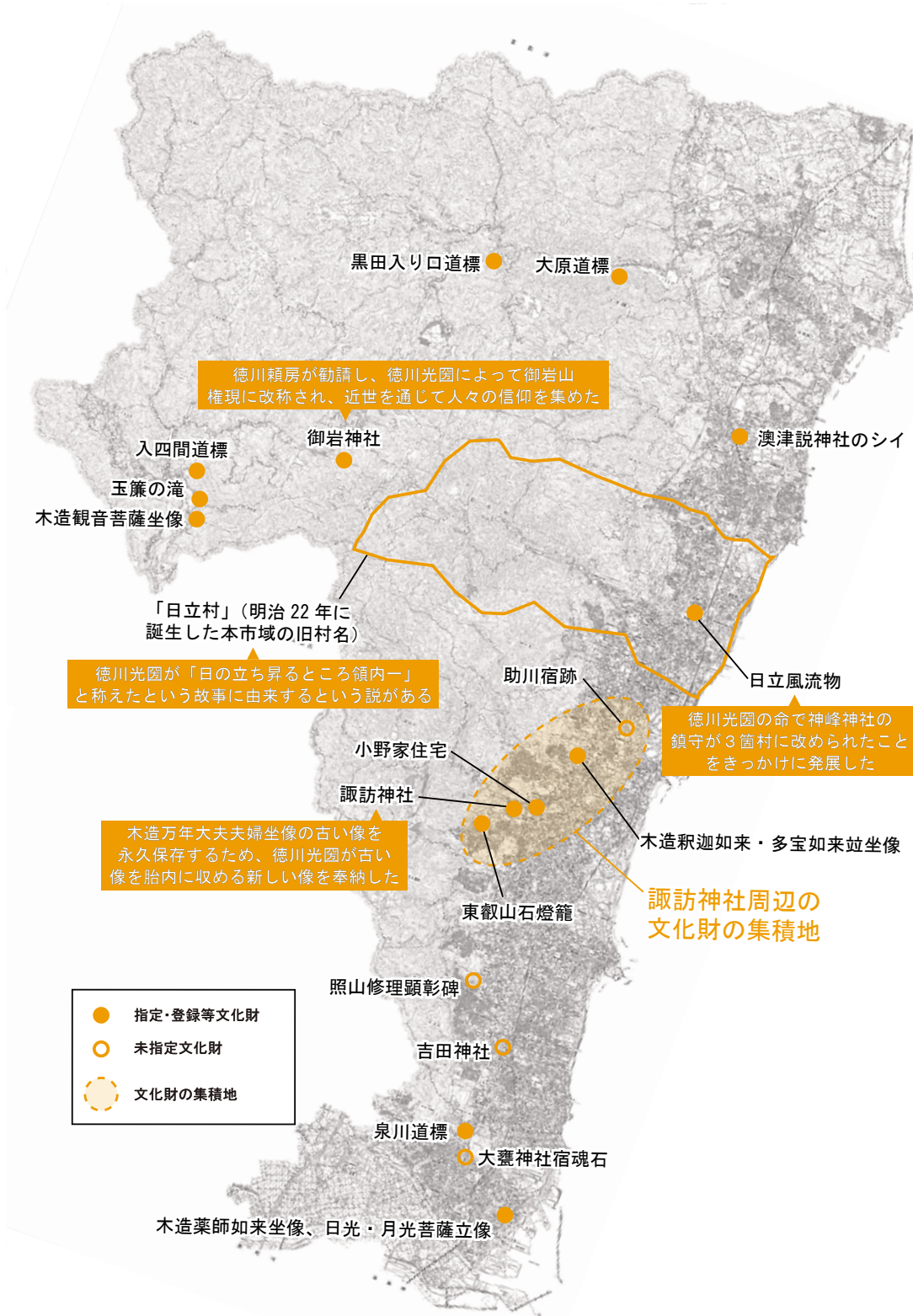
## イ 主な文化財の概要

名称	概要	写真
<p><b>御岩神社</b> (写真:観光いばらき HP より)</p>	<p>御岩神社は、寛永7年(1630)に初代藩主徳川頼房によって湯殿山権現を御岩山に勧請したのがはじまりとされる。徳川光圀により御岩山権現に改称され、江戸時代を通じて人々の信仰を集めた。明治期に神仏分離令により権現名が廃止となり、御岩神社となった。</p>	
<p><b>木造観音菩薩坐像</b> (写真:『日立市の文化財』より)</p>	<p>徳川光圀は仏像の保護に尽力した。木造観音菩薩坐像は玉簾寺観音堂の本尊である。像内に墨書銘札が納入されており、貞享3年(1686)、光圀が所持していた仏像に装飾荘厳して玉簾寺に移したことが記されている。</p>	
<p><b>日立風流物</b> (写真:日立市 HP より)</p>	<p>元禄8年(1695)、徳川光圀の命によって宮田村の神峰神社が助川村と相賀村(元禄11年に会瀬村となる)3箇村の鎮守と改められた際、渡御の行程が長くなったことによって、祭礼の山車が工夫改良を加えられ風流化した。これが今日まで続く日立風流物の起源といわれている。</p>	
<p><b>澳津説神社のシイ</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>澳津説神社は天文13年(1544)に開山し万治元年(1658)に現在地に遷宮されたと伝えられる神社である。徳川光圀の命によって一村の総鎮守となり、境内のスダジイも現在まで神木として長く保護されることになった。</p>	
<p><b>玉簾の滝</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>玉簾寺境内にある玉簾の滝は、その優美な姿から水戸藩主や文人墨客が来遊し、詩歌などを作ってきた。「玉簾の滝」の名称は、徳川光圀が天和3年(1683)に訪れた際、滝の様相が軒下に吊るす簾に似ているところから命名したものである。</p>	
<p><b>助川宿跡</b> (写真:『ふるさと日立検定 公式テキストブック中級編』より)</p>	<p>近世の陸上輸送の基本は伝馬制度であり、宿駅は人足や馬を常備した重要な施設だった。本市域でもいくつかの村に置かれ、助川宿はその中で最も栄えた宿駅である。本陣「長山家」には徳川光圀も度々訪れていた記録が残るが、昭和20年(1945)の空襲で焼失した。</p>	



## ウ 文化財の分布状況と集積地

歴史文化の特徴（3）－2を示す文化財は、市内全域に分布している。特に、市内中心部には、徳川光圀の文化財保護の史実を伝える諏訪神社の木造万年大夫夫婦坐像や、民家建築のうち唯一の指定文化財である小野家住宅、最も賑わった宿駅であり光圀も本陣に度々訪れていたとされる助川宿跡等が集積しており、諏訪神社周辺の文化財の集積地を抽出することができる。



図：歴史文化の特徴（3）－2「近世日立を巡った水戸黄門の足跡」を示す文化財の分布状況と諏訪神社周辺の集積地

### (3) - 3 幕末の海防施設が語る動乱

水戸藩第9代藩主徳川斉昭は、幕末の動乱期に水戸藩の藩政を握った人物である。中世に築かれた大窪城跡に郷校興芸館（後の暇修館）を建てるとともに、藩政改革に着手した。また、東部に長い海岸線を有する本市域において、幕末に頻繁に出没するようになった異国船を警戒し、助川海防城（助川村）や海防陣屋（大沼・友部村）等の海防施設を設置した。しかし、尊王攘夷運動の高まりとともに水戸藩は同じ藩内で天狗党と諸生党という派閥に分かれて争い、助川海防城は天狗諸生の最後の戦いの場となって焼け落ちた。天狗諸生の争いの痕跡は、小野家住宅のダイコク柱にも残っている。また、助川海防城の初代海防惣司を務めた、斉昭の家老山野邊義観にまつわる太刀や短刀、山野邊家墓所といった文化財も往時を偲ばせる。さらに、明王山不動尊に奉納された絵馬には、助川海防城跡の落城間近の文久4年（1864）のものがあり、動乱の最中における民衆の祈りが込められている。その他、江戸時代後期の貴重な文化財として、旧助川西上町舞屋台等が本市内に伝わる。

歴史文化の特徴（3）-3を示す文化財は以下のとおりである。

#### ア 文化財一覧

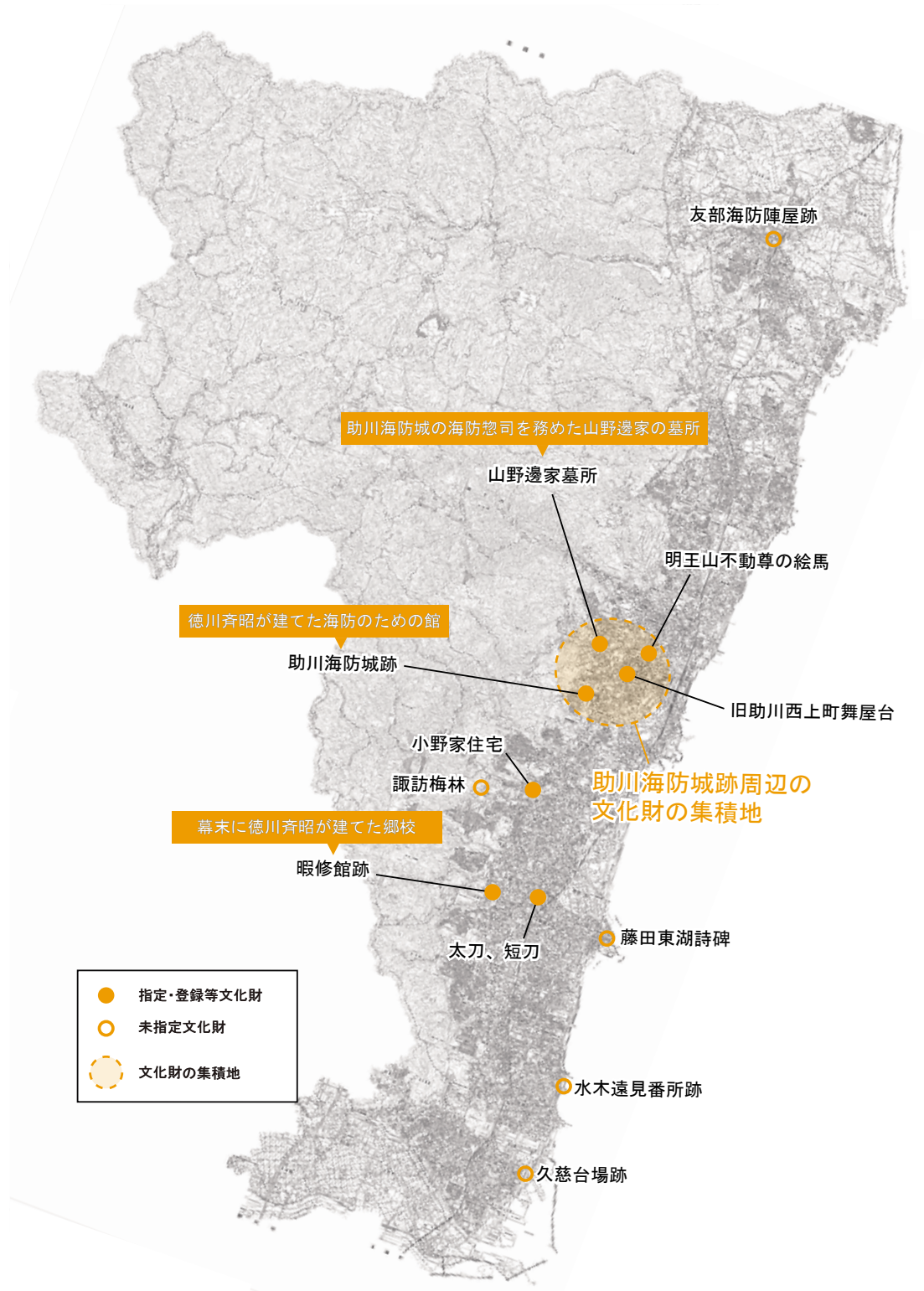
分類		文化財
建造物	海防施設	助川海防城跡、久慈台場跡、友部海防陣屋跡、水木遠見番所跡 等
	郷校	暇修館跡 等
	住宅	小野家住宅 等
石造物		山野邊家墓所、藤田東湖詩碑 等
刀、銃		太刀、短刀、火縄三眼銃 等
絵画		友部村絵図
絵馬		明王山不動尊の絵馬 等
幟		藤田東湖揮毫諏訪神社大のぼり、藤田東湖揮毫南高野鹿島神社大幟 等
祭屋台		旧助川西上町舞屋台 等
自然物		諏訪梅林

イ 主な文化財の概要

名称	概要	写真
<p><b>助川海防城跡</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>東部に長い海岸線を有する水戸藩では、徳川頼房の時代から異国船に注意が払われてきた。助川海防城は、徳川斉昭が家老山野邊義観を海防惣司に任命して建てた海防のための館である。元治元年(1864)に天狗諸生の争いの場となり焼け落ちた。</p>	
<p><b>暇修館跡(大窪城跡)</b> (写真:『図説 日立市史』より)</p>	<p>大窪城は治承元年(1177)に平氏が大久保の愛宕山に築いた城で、応永期(1394～1428)に佐竹氏の重臣大窪氏が居城とし、現在地である天神山へ移した。大窪城跡の一部には、天保10年(1839)に水戸藩の郷校興芸館が建てられ、後に暇修館に改称された。</p>	
<p><b>小野家住宅</b> (写真:『日立市の文化財』より)</p>	<p>茨城県の北部一帯から太平洋沿岸にかけては、曲り屋形式の民家が見られる。小野家住宅は、代表的な曲り屋形式の民家であり、18世紀前期建立と推定される。ダイコク柱の深い刃傷は、幕末動乱期における天狗諸生の争いの痕跡である。</p>	
<p><b>山野邊家墓所</b> (写真:『日立市の文化財』より)</p>	<p>山野邊家は出羽一国の山形城主最上義光の四男を祖とする。8代山野邊義観の時に徳川斉昭の命により助川館に移住し、その後3代にわたって助川海防惣司を務めた。幕末に天狗諸生の争いで天狗党に与した10代義藝は幕府軍に降伏し、家名断絶を命じられた。</p>	
<p><b>太刀</b> <b>短刀</b> (写真:短刀『日立市の文化財』より)</p>	<p>短刀は、助川海防城海防惣司の山野邊義観と親交のあった幕末の一流刀匠大慶直胤が作製したものである。また、太刀は義観の家臣大江勝永が大慶直胤の指導を受け作製したものである。</p>	
<p><b>藤田東湖揮毫諏訪神社大のぼり</b> <b>藤田東湖揮毫南高野鹿島神社大幟</b> (写真:藤田東湖揮毫南高野鹿島神社大幟『日立市の文化財』より)</p>	<p>藤田東湖は、幕末水戸学の学者であり、徳川斉昭の信任を得て天保の藩政改革等に尽力した人物である。これらの幟は、藤田東湖が揮毫してそれぞれ諏訪神社・鹿島神社へ奉納したものである。</p>	
<p><b>旧助川西上町舞屋台</b> (写真:『日立市の文化財』より)</p>	<p>旧西川西上町舞屋台は、江戸時代後期から、助川鹿嶋神社や神峰神社の祭礼において、助川村の4町から一台ずつ奉納された祭屋台のうちの一台中の一台である。往時は華やかに祭を彩ったが、太平洋戦争の折に西上町の屋台を除く3台は焼失した。</p>	

## ウ 文化財の分布状況と集積地

歴史文化の特徴（３）－３を示す文化財は、市内全域に分布している。特に、市内中心部には、徳川斉昭の海防政策を象徴し、水戸藩で起こった天狗諸生の争いの痕跡も示す助川海防城跡、助川海防城の海防惣司を務めた山野邊家の墓所、幕末における民衆の祈りが込められた明王山不動尊の絵馬、



図：歴史文化の特徴（３）－３「幕末の海防施設が語る動乱」を示す文化財の分布状況と助川海防城跡周辺の集積地

#### (4) 日立鉱山が導いた近代鉱工業都市としての始まりと発展

近代には久原房之助・小平浪平により日立鉱山・日立製作所が創業し、現代に通じる鉱工業都市日立が幕を開けた。

地下資源に恵まれた多賀山地では、近世から赤沢銅山の採掘が行われていたが、麓の村への悪水流出による農業被害等が障害となり、開発は進んでいなかった。明治 38 年

(1905) に赤沢銅山を買い取った久原房之助は、日立鉱山と名前を変え、巨額の資金を投入し、それまで鉱山開発で使用されたことのない電気を動力として開発を推進した。開発の弊害として、銅製錬によって発生した排煙に含まれる亜硫酸ガスにより、周辺地域の農作物や山林が枯れるといった事態が起こったが、久原房之助は当時世界一の高さとなった大煙突の建設や、亜硫酸ガスに耐性のあるオオシマザクラの植栽等によって山林の回復に成功した。また、日立鉱山の重要施設である発電所の責任者だった小平浪平は、5馬力誘導電動機の開発をきっかけに、新工場として日立製作所を設立した。

昭和 16 年 (1941) に開戦した太平洋戦争下においては、本市は、その高い技術力で軍需工場地帯として発展していたことから、戦争末期にアメリカ軍の爆撃を受け、市街地のほとんどが焼失した。終戦後は日立製作所社長の小平浪平の指揮の下、工場復旧を手始めに本市は再建を果たした。

日立鉱山及び日立製作所は操業を続け、現在の J X 金属及び日立製作所として、世界に向けて展開する本市の工業を担っている。近世までの課題を克服した久原房之助の鉱山開発は、現代に繋がる新しい近代の日立を生み出した。

歴史文化の特徴 (4) を示す文化財は以下のとおりである。

#### ア 文化財一覧

分類	文化財
建造物	御岩神社、旧共楽館(日立武道館)、旧久原本部、日立オリジンパーク(近代に開業した日立製作所の記念館)、里川発電所、昇開式可動橋、大煙突、日鉱記念館(近代に開業した日立鉱山跡地に建つ記念館)、中里発電所、日立市天気相談所、JR日立駅駅舎 等
石造物	下孫停車場記念碑、日立製作所創業石、三代芳松像 等
工業製品	5馬力誘導電動機 附設計図1枚 等
戦災跡	1トン爆弾弾痕 等
自然物	サクラ、玉簾の滝 等



写真: 明治 42 年 (1909) 頃の日立製作所創業小屋(『図説 日立市史』より)



写真: 煙害対策として植樹された日立鉱山跡のオオシマザクラ(ひたち風 HP より)

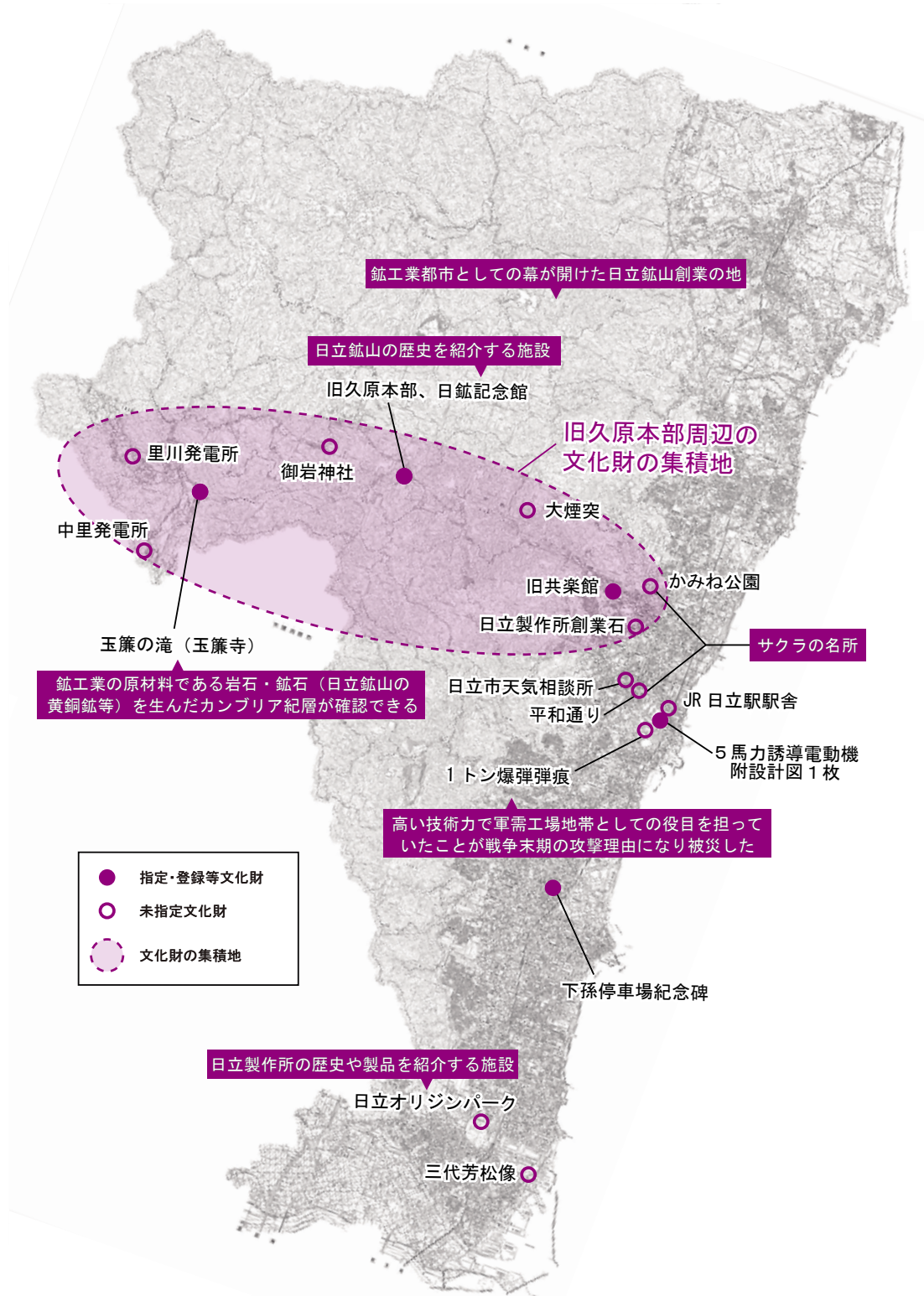
## イ 主な文化財の概要

名称	概要	写真
<p><b>旧共楽館(日立武道館)</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>日立鉱山と日立製作所は、工場周辺に従業員のための住宅や病院、郵便局等を設置した。共楽館は日立鉱山が設置した劇場であり、従業員のみならず一般村民も利用できる娯楽施設として賑わった。現在は日立武道館として利用されている。</p>	
<p><b>旧久原本部</b> (写真:『図説 日立市史』より)</p>	<p>旧久原本部は、日立鉱山中枢部の一角に位置する。明治 38 年(1905)に久原房之助が旧赤沢銅山を買収し日立鉱山と改称して開業した際に、本部とした小家屋である。久原房之助はここで幹部らとともに、鉱山開発に力を尽くした。</p>	
<p><b>昇開式可動橋</b> (写真:ひたち風 HP より)</p>	<p>国道 245 号は海岸沿いの工場施設や茨城港日立港区を繋ぎ、市内で作られた工業製品の運搬に利用されている。昇開式可動橋は、大型機械の運搬の際にその通行が妨げられないよう設置されたもので、本市ならではの仕掛けが施されている。</p>	
<p><b>大煙突</b> (写真:『新郷土日立 歴史』より)</p>	<p>日立鉱山では、銅製錬によって発生した亜硫酸ガスにより、農作物や山林が枯れる煙害が周辺村民の生活を脅かしていた。久原房之助は巨額の資金を投じて当時世界一の高さの大煙突を建設し、鉱山開発と自然環境保護の両立に成功した。</p>	
<p><b>中里発電所</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>中里地区の里川から水を取り入れ電力をつくる、水路式発電所である。明治 41 年(1908)に完成し、当時事業拡大のため多くの電力を必要としていた日立鉱山の施設として使用された。現在は東京発電の所有管理となっており、稼働中の水力発電所では県内最古のものである。</p>	
<p><b>日立市天気相談所</b> (写真:ひたち風 HP より)</p>	<p>日立鉱山の煙害対策の一つに神峰山測候所での気象観測がある。気象観測で煙の方向を判断し溶鉱炉の操業を加減する「制限溶鉱」によって、排煙の量をコントロールした。神峰山測候所は後に日立市天気相談所となった。</p>	

名称	概要	写真
<p><b>JR日立駅駅舎</b> (写真: 日立の観光案内 HP より)</p>	<p>日立製作所等の諸工場は、製品輸送に便利な日立駅を中心に建設されていった。現在の日立駅は平成 23 年(2011)に本市出身の建築家妹島和世氏がデザイン監修した建築で、太平洋を臨む立地を活かしており、世界でも美しい駅舎の一つとしての評価を受けている。</p>	
<p><b>三代芳松像</b> (写真: 『新郷土日立 歴史』より)</p>	<p>本市では、鉱工業だけでなく漁業も盛んに行われている。近代には、技術開発や漁港の整備が実施された。久慈の三代芳松は、大正 15 年(1926)に改良揚繰網漁を考案し、イワシの漁獲量増大に貢献した。</p>	
<p><b>5馬力誘導電動機</b> <b>附設計図1枚</b> (写真: 『図説 日立市史』より)</p>	<p>5馬力誘導電動機(5馬力モーター)は、日立鉱山の発電所で技師をしていた小平浪平が開発した電動機である。この電動機開発をきっかけとした、久原房之助の資金援助を受けての新工場設立が、小平浪平による日立製作所の創業となった。</p>	
<p><b>1トン爆弾弾痕</b> (写真: 『図説 日立市史』より)</p>	<p>昭和 16 年(1941)に開戦した太平洋戦争で軍需工場地帯として著しく発展した本市は、戦争末期に激しい爆撃に見舞われ市街地が焼失した。市内には、1 トン爆弾弾痕や、宮田町の仲町小学校近くにある焼け残った消防団小屋の柱など、戦災跡が各所に残る。</p>	
<p><b>サクラ</b> (写真: ひたち風 HP より)</p>	<p>大正4年(1915)頃から、日立鉱山は煙害によって荒廃した山林を回復するため、本山通りや山麓の周辺村落にオオシマザクラやソメイヨシノを植林した。これが本市のサクラの始まりであり、現在でも毎年春には、かみね公園や平和通りの桜並木が賑わいを見せている。</p>	
<p><b>玉簾の滝</b> (写真: 『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>県北の名瀑として名を馳せている高さ18m、幅8m の優美な滝であり、玉簾寺の境内に位置する。滝つぼ付近では、鉱工業発展の礎となった岩石・鉱石を産出したカンブリア紀層を、露出した状態で確認することができる。</p>	

## ウ 文化財の分布状況と集積地

歴史文化の特徴（４）を示す文化財は、市内平野部から本山通り沿いに分布している。特に、本山通り（現県道 36 号）沿いには、旧久原本部や大煙突、旧共楽館（日立武道館）といった日立鉱山の関連施設や、煙害対策として植樹されたサクラが現在も毎春咲き誇るかみね公園等が集積しており、旧久原本部周辺の文化財の集積地を抽出することができる。



図：歴史文化の特徴（４）「日立鉱山が導いた近代鉱工業都市としての始まりと発展」を示す文化財の分布状況と旧久原本部周辺の集積地



## (5) 坂東と陸奥を繋ぐ街道

東が太平洋、西が多賀山地に挟まれる台地を中心に市域が形成される本市は、その地理的な条件から市内を縦断し関東平野と東北地方を繋ぐ街道が整備されてきた。

古代の『常陸国風土記』には、「久慈の境の助川（現宮田川）をもって道前とし、陸奥国の石城郡苦麻の村（現福島県大熊町）をもって道後とした」という記述があり、「道前」とされた宮田川北側が陸奥国への入口と認識されていたことが分かる。奈良時代初期には、反乱を起こした陸奥国の蝦夷征討のため軍用道路として官道が整備され、道前には公的施設として藻島駅家が設置された。長者山遺跡は、この「藻島駅家」に推定される遺跡である。

中世になると、本市域東部の海岸線から出発して多賀山地を抜け、佐竹氏の本拠があった現在の常陸太田市へ向かう東西の生活道路が形成された。人々は本市域の豊かな自然環境の中で作られた塩や鉄を太田城の城下町へ運び、産業が発達した。この東西の道は、現在県道 37 号や山側道路（県道 61 号）に継承されている。

近世には、徳川幕府によって江戸を中心とする五街道が整備され、五街道を補助する脇往還として本市域には岩城相馬街道と棚倉街道が通った。これらの街道が、現在の国道 6 号と国道 349 号に継承されている。街道沿いには、旅人のために松が植えられ、一里塚や道標が築かれ、助川宿をはじめとする宿駅が栄えた。貨幣経済の発展に伴い、人々の社寺参詣や物資の流通はますます盛んになった。

現代の道路は、本市の電気機械工場で作られた製品や原材料を運搬する流通網としての重要な役割を担っている。このように、本市の街道は、時代によって異なる性格を有しながら、古代から現代まで受け継がれてきた。

歴史文化の特徴⑤を示す文化財は以下のとおりである。

### ア 文化財一覧

分類		文化財
遺跡		長者山遺跡 等
建造物		鱸神社、澳津説神社 等
石造物	道標	泉川道標、入四間道標、大原道標、黒田入り口道標 等
	仏像	金山百観音 等
道		古代官道跡、国道 6 号(近世の旧岩城相馬街道、明治期の旧陸前浜街道)、国道 245 号、国道 349 号(旧棚倉街道)、県道 36 号・37 号・60 号・61 号、等
自然物		豎破山の太刀割石 等
宿駅跡		助川宿跡 等
塚跡		伊師町一里塚跡 等
地名(塚跡)		「前塚」(助川一里塚跡) 等









写真:長者山遺跡(日立の観光案内 HP より)



写真:現代の国道6号

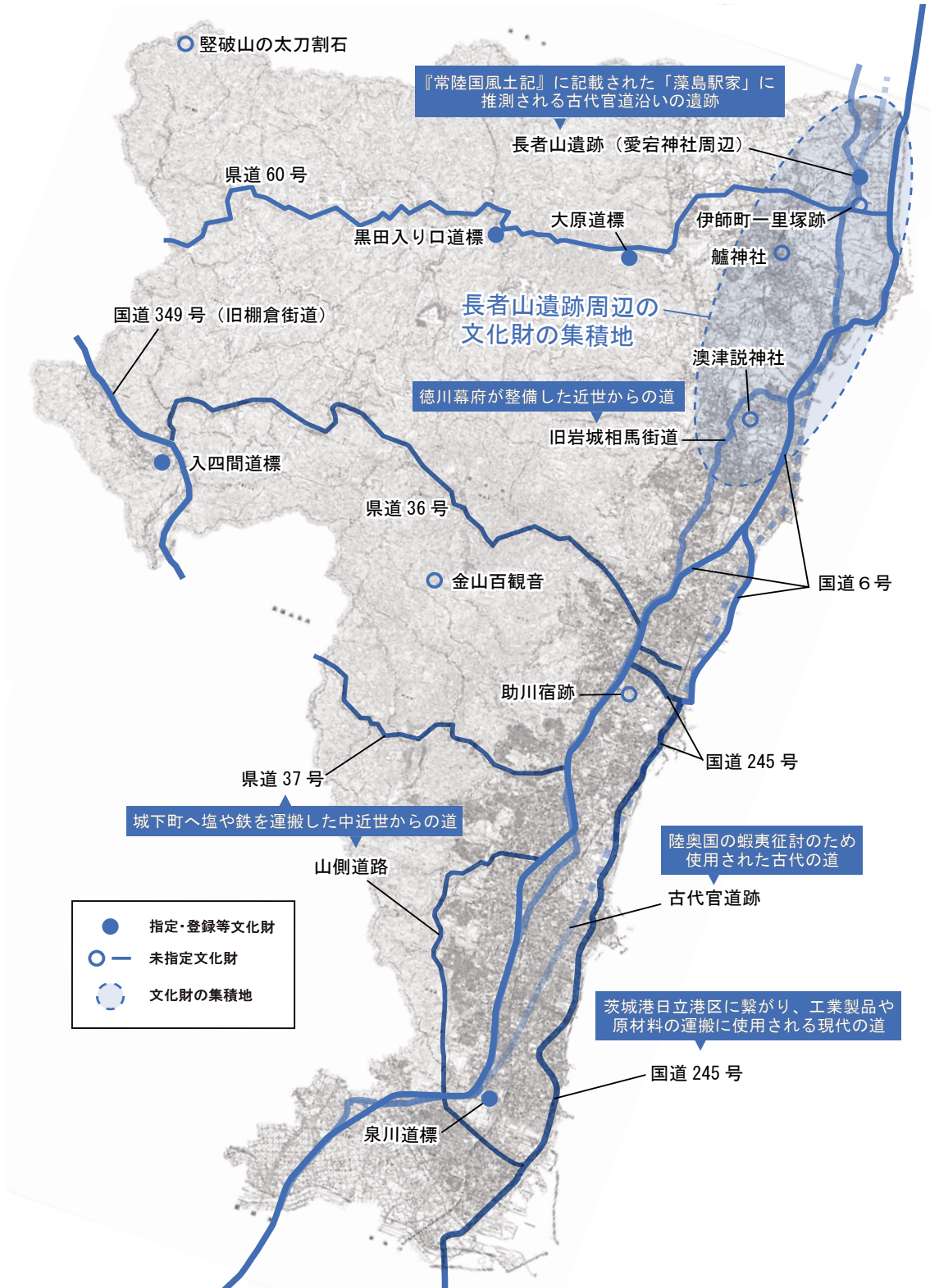
## イ 主な文化財の概要

名称	概要	写真
<p><b>長者山遺跡</b> (写真: 日立の観光案内 HP より)</p>	<p>長者山遺跡は、愛宕神社周辺で発掘された「藻島駅家」に推定される遺跡である。藻島駅家は和銅期～養老期(708～724)に反乱を起こした陸奥国の蝦夷征討のために古代官道沿いに設置された駅家の一つであり、『常陸国風土記』にも記述がある。</p>	
<p><b>泉川道標</b> (写真: 『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>泉川道標は明和8年(1771)に建てられたもので、当時常陸式内社 28 社めぐりの一つとして増加した泉神社への参詣客のため、大甕神社前を通る旧国道から泉神社へ至る分かれ道に設置された。</p>	
<p><b>入四間道標</b> (写真: 『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>入四間道標は安永4年(1775)に建てられた。古来霊山として信仰の厚かった御岩山や近世に水戸徳川家によって勧請された湯殿山権現(現御岩神社)への参詣客のため、棚倉街道(現国道349号)から入四間方面へ至る分かれ道に設置された。</p>	
<p><b>金山百観音</b> (写真: 『日立市の文化財』より)</p>	<p>高鈴ハイキングコースの傍らに祀られている、安永3年(1774)銘の石仏 60 数基である。参詣すれば西国 33 所・坂東 33 所・秩父 34 所を巡礼したのと同じ功德が得られるとされた。日立市域をはじめとして、周辺市域の人々によって奉納された。</p>	
<p><b>古代官道跡</b> (写真: 『長者山遺跡がつなぐ古代の道と常陸国風土記の世界』より)</p>	<p>都から太平洋沿岸を北上し陸奥国に至る道である。陸奥国の蝦夷を征討するため軍需物資の輸送や征討軍の移動に使用された軍用道路の性格を有しており、蝦夷征討事業の収束に合わせて、古代官道沿いに設置された駅家が平安時代初期に廃止された。</p>	
<p><b>国道6号(旧岩城相馬街道)</b></p>	<p>江戸時代に徳川幕府によって整備された脇往還の一つであり、水戸から奥州の岩城・岩沼(現宮城県)までを結んだ。街道沿いには、田中内、森山、諏訪、助川、滑川、川尻、伊師に一里塚が築かれた。</p>	

名称	概要	写真
<p>県道 37 号 山側道路</p>	<p>県道 37 号や山側道路等は、中近世に産業の発達に伴い形成された東西方向の道が現在に継承されている。本市域で採れる材料を基に作られた塩や鉄が、佐竹氏や水戸徳川家の本拠である城下町まで運搬された。</p>	
<p>国道 245 号</p>	<p>近代以降、本市には日立製作所をはじめとする電気機械系企業の関連工場が多く建設された。市内道路は、製品や原材料の運搬に利用される重要な流通網であるが、特に国際港である茨城港日立港区に繋がる国道 245 号は肝となる物流を担っている。</p>	
<p>国道 349 号(旧棚倉街道)</p>	<p>江戸時代に徳川幕府によって整備された脇往還の一つであり、水戸から東河内を経て棚倉(現福島県)までを結んだ。街道沿いには、東上淵に一里塚が築かれた。</p>	
<p>豎破山の太刀割石 (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>十王町の豎破山は、蝦夷征討の行路に黒坂命や坂上田村麻呂も戦勝を祈願したと伝わる信仰の地であり、『常陸国風土記』にも記述のある山である。頂上には、八幡太郎義家が切ったとされる真っ二つに割れた太刀割石があり、蝦夷征討の神として崇敬されていたと言われる。</p>	
<p>助川宿跡 (写真:『ふるさと日立検定 公式テキストブック中級編』より)</p>	<p>近世の陸上輸送の基本は伝馬制度であり、宿駅は人足や馬を常備した重要な施設だった。本市域でもいくつかの村に置かれ、助川宿はその中で最も栄えた宿駅である。本陣「長山家」には徳川光圀も度々訪れていた記録が残るが、昭和 20 年(1945)の空襲で焼失した。</p>	
<p>地名「前塚」 (助川一里塚跡) (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>助川一里塚跡は、助川宿の南(現助川小学校正門付近)にあったと伝わるが、明治 32 年(1899)頃の道路拡張工事により撤去され現存しない。ただし、助川小学校北側付近の小字名「前塚」は、この土地が一里塚の前に位置していたことを示している。</p>	

## ウ 文化財の分布状況と集積地

歴史文化の特徴（5）を示す文化財は、市内全域に分布している。特に、市内北部には、古代の街道の役割を示すとして平成 30 年（2018）に国指定文化財になった「長者山官衙遺跡及び常陸国海道跡（国）」や、近世に建てられた伊師町一里塚等が集積しており、長者山遺跡周辺の文化財の集積地を抽出することができる。



図：歴史文化の特徴（5）「坂東と陸奥を繋ぐ街道」を示す文化財の分布状況と長者山遺跡周辺の集積地

## (6) 神宿る峰へ捧げる山車からくりと多様な祭礼

西部を山地が迫る本市には、古来山への信仰が根付いている。室町時代に神峰山に祀られた神峰神社は、7年に一度の大祭礼において宮田町の東・北・本・西町から一台ずつ日立風流物を引き出し、市内を渡御して人々の安寧を祈念する。日立風流物の起源は、元禄8年(1695)、徳川光圀の命によって神峰神社が3箇村の総鎮守と改められた際、渡御の行程が長くなったことによって、祭礼の山車が工夫改良を加えられたことに遡る。そして、近代以降の日立鉾山の発展に伴う経済成長や人口増加によって、日立風流物の規模も現在の形にまで拡大してきた。近年では、かみね公園・平和通りで開催される日立さくらまつりでも毎年一台が公開され、観光客から喜ばれている。また、渡御行列の先導は、ささらという獅子舞によってなされる。

このような各神社で行われる伝統的な行事の他にも、十王町等では地域の伝承行事として鳥追いまつり・鳥追い行事やどんど焼き、まゆ玉飾りが行われており、これらの中には近年復活したものもある。また、十王まつりでは、十王中学校の生徒による十王鶉鳥舞が披露されている。これは、地域の歴史を伝えていくために創作された踊りであり、日本唯一のウミウ捕獲地という「ひたらしさ」に由来する新たな芸能となっている。

祭礼や行事は、過去の伝統を受け継ぎながら新しい息吹を得て、次の世代へと伝えられている。歴史文化の特徴(6)を示す文化財は以下のとおりである。

### ア 文化財一覧

分類		文化財
建造物	神社	会瀬鹿島神社、泉神社、大久保鹿嶋神社、神峰神社、助川鹿嶋神社、諏訪神社、成沢鹿島神社 等
公園、道		かみね公園、平和通り 等
祭礼の出し物	風流物	日立風流物、小木津浜風流物、河原子風流物 等
	風流物の部品	日立風流物人形頭、日立郷土芸能保存会北町支部所有の風流物人形頭、日立郷土芸能保存会西町支部所有の風流物人形頭 等
	ささら	日立のささら(会瀬ささら・大久保ささら・助川ささら・諏訪ささら・成沢ささら・水木ささら・宮田ささら) 等
	祭屋台	旧助川西上町舞屋台 等
自然物		石名坂のエノキ 等
祭礼		鹿嶋神社流鏝馬、泉神社例大祭、御岩神社回向祭、大久保鹿嶋神社出社祭礼、神峰神社大祭礼、十王鶉鳥舞、助川鹿嶋神社例祭、諏訪神社例大祭、鳥追いまつり・鳥追い行事、どんど焼き、成沢鹿島神社出社祭礼、日立さくらまつり、まゆ玉飾り 等



写真: 神峰神社



写真: 日立市郷土博物館の日立風流物展示

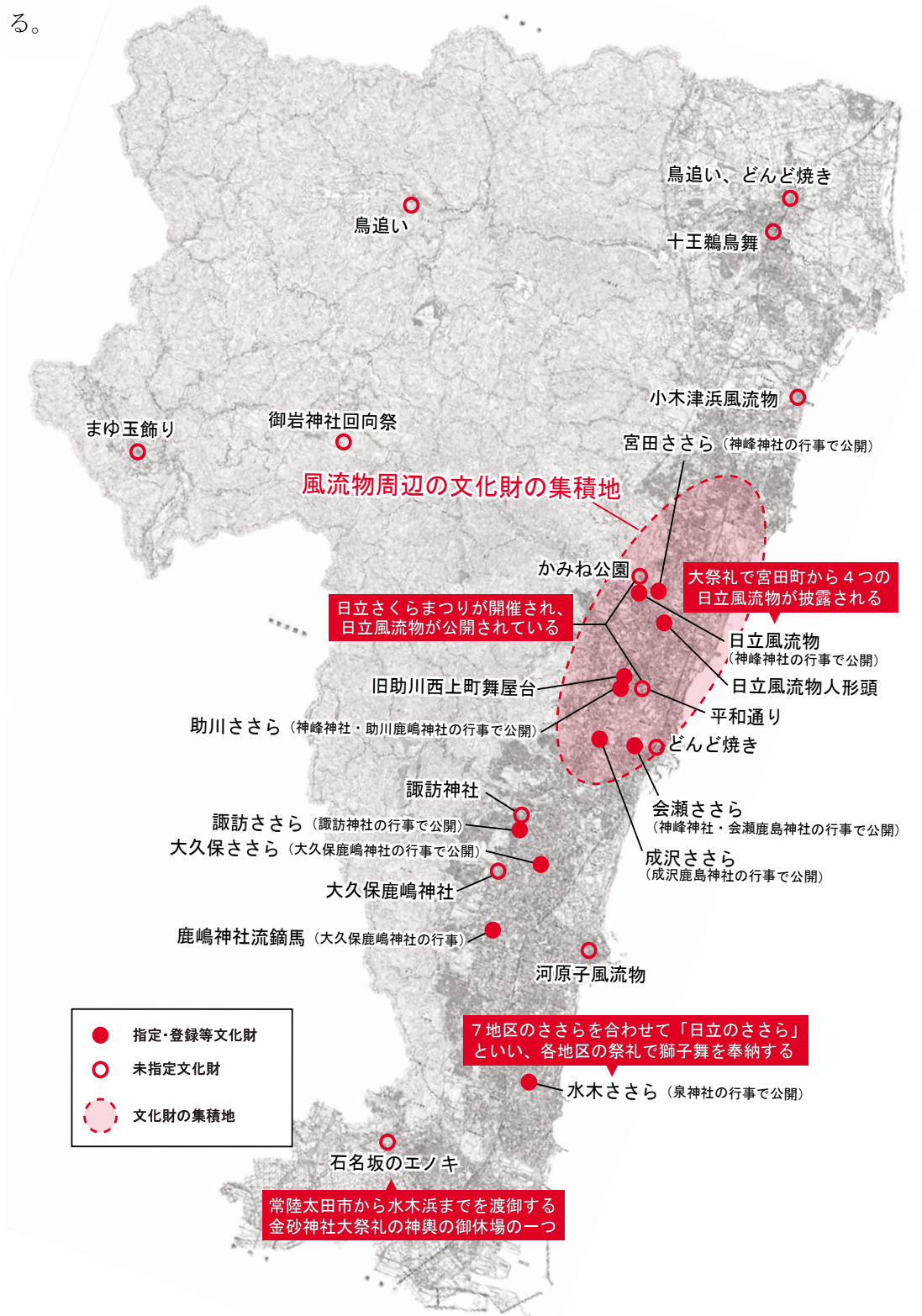
## イ 主な文化財の概要

名称	概要	写真
<p><b>日立風流物</b> (写真:日立市 HPより)</p>	<p>日立風流物は、ユネスコ無形文化遺産に登録されたからくり行事である。本来は神峰神社大祭礼において披露されていたが、現在は昭和 38 年(1963)から開始された日立さくらまつりでも公開され、本市に賑わいを生んでいる。</p>	
<p><b>小木津浜風流物</b> <b>河原子風流物</b> (写真:河原子風流物『ふるさと日立検定 公式テキストブック中級編』より)</p>	<p>現存する日立風流物以外にも、風流物は存在した。小木津浜風流物の起源は安政元年(1854)ともいわれ、戦後途絶えていたが平成になって復活し、地域の祭りで公開されている。河原子風流物は昭和 37 年(1962)が最後になり、現在は人形の首がいくつか残る。</p>	
<p><b>日立のささら</b> (写真:宮田ささら『新郷土日立地理 &lt;改訂二版&gt;』より)</p>	<p>日立のささらは宮田・助川・会瀬・成沢・諏訪・大久保・水木の7地区のものがある。それぞれ、地域の神社において祭礼の際に神輿の先導を務め、獅子舞を奉納する。明確な起源は分かっていないが、近世初期には成立していたとされる。</p>	
<p><b>石名坂のエノキ</b> (写真:『ふるさと日立検定 公式テキストブック中級編』より)</p>	<p>金砂神社大祭礼では、常陸太田市の西金砂神社と東金砂神社の神輿が 72 年に一度日立市石名坂を経て水木浜へ渡御する。第1回は仁寿元年(851)に行われた。行程は一週間に亘るため、神輿の御休場が設けられており、石名坂のエノキもその一箇所である。</p>	
<p><b>鹿嶋神社流鏝馬</b></p>	<p>毎年 10 月 29 日に秋季例大祭で行われる鹿嶋神社の行事で、馬1頭、騎手・引手各1人が神社参道を歩みながら3箇所の的に矢を射ることを3回繰り返す。佐竹義重が関わり、天正 12 年(1584)に始まったと伝えられている。</p>	
<p><b>御岩神社回向祭</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)</p>	<p>御岩神社で毎年4月と 10 月の第3土・日曜日に開催される祭りであり、死者のために仏事を営み冥福を祈る。御岩神社は、元は湯殿山権現(御岩山権現)といったが、明治期に神仏分離令により権現名が廃止となったため、現在でも神仏混淆の姿が残っている。</p>	

名称	概要	写真
<b>神峰神社大祭礼</b> (写真:『ふるさと日立検定 公式テキストブック中級編』より)	本来は不景気になると世直し祭りとして不定期に行われていたが、平成3年(1991)から7年に一度5月3～5日に行われることに決まった。宮田・助川・会瀬ささらが渡御を先導し、旧宮田村4町から1台ずつ計4台の日立風流物が披露される。	
<b>十王鶉鳥舞</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)	十王鶉鳥舞は、鶉捕りが行われている十王町において、町の風土や歴史を伝えていくため、十王中学校の教員と生徒が創り上げた創作芸能であり、平成17年(2005)から始まった。成果は、毎年8月上旬に行われる十王まつり等で披露されている。	
<b>鳥追いまつり</b> <b>鳥追い行事</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)	小正月(1月15日)の行事であり、起源は不明だが伝承行事として十王町の伊師や高原等で行われている。1月14日の晩と15日の朝に子供たちが鳥追い棒を打ち鳴らし農作物を荒らす害鳥を追い払うというものである。	
<b>どんど焼き(焚きあげ祭)</b> (写真:『日立市民文化遺産ガイドブック』より)	小正月(1月15日)の行事であり、起源は不明だが伝承行事として十王町の伊師等で行われている。正月飾りや使えなくなった文房具等を積んで火をつけ、物への感謝の気持ちや一年の健康を祈念するというものである。	
<b>日立さくらまつり</b> (写真:観光いばらきHPより)	日立のさくらは日立鉱山による植林が始まりであり、昭和中期には平和通りとかみね公園にソメイヨシノ等が植えられた。平和通りとかみね公園で開始された日立さくらまつりでは、毎年一台の日立風流物が公開され、日立風流物の伝統を受け継ぐ行事となっている。	
<b>まゆ玉飾り</b> (写真:『ふるさと日立検定 公式テキストブック中級編』より)	小正月(1月15日)の行事であり、起源は不明だが伝承行事として中里地区・十王地区等で行われている。五穀豊穡を願って餅をミズキやナラの枝に繭状につけ、かまどなどに飾りつけるというものである。	

## ウ 文化財の分布状況と集積地

歴史文化の特徴（6）を示す文化財は、市内全域に分布している。特に、市内中心部には、大祭礼においてユネスコ無形文化遺産である日立風流物が公開される神峰神社や、日立さくらまつりにおいて日立風流物が公開される平和通り及びかみね公園等が集積しており、祭りの開催時には市内の雰囲気を華やかに一変させる風流物周辺の文化財の集積地を抽出することができる。



図：歴史文化の特徴（6）「神宿る峰へ捧げる山車からくりと多様な祭礼」を示す文化財の分布状況と風流物周辺の集積地